今より羅馬に往き、も一度十字架にかゝる積である」と仰せられた故。ペテロは恐れ入り。「嗚呼主よ赦し給へ、主は既に一度十字架にかゝつて救の道を立て給ふた故、此上は唯私共が、銘々十字架を負ふて最後迄戰ひ續くべき筈であるに。私は今卑怯未練な眞似をして、再び主を十字架にかけ奉つらふと致しました。私の罪を赦し給へ。私は今から直に羅馬に引返しまする」と言ふて乃ち其市に歸り。終に逆十字架にかけらるゝ迄、忠節を盡したといふことがある。其通り私共も亦どんな事情があつても十字架から下りてはならぬ。最後迄其十字架に留り、よく始あり又よく終りある犧牲献身の生涯を一貫せねばならぬ。

第四、十字架の後には榮の冠冕がある。「一粒の麥地に落ちて死ずば唯一つにてあらん、死ば多くの果を結ぶべし。」耶蘇の十字架は無益ではなかつた。無益でない處か、世界あつて以來、耶蘇の十字架位、廣く、深く、又遠く、人類に功德を及ぼした出來事は、曾て起らなかつたのである。私共も亦十字架をとつて耶蘇に從ふてのみ、眞に世の爲め人の爲めになる樣な御奉公をすることが出來るのである。改革者サボナローラの言に「戰爭なくば勝利なく、勝利なくば冠冕なし」とあり。ウイリアム、ペンは又「十字架なくば冠冕なし」といふて居る。私共は耶蘇の苦みに與かることに由て、亦其榮を與かるものとならねばならぬ。

第五、それと同時に、記憶すべきは、十字架の前にゲッセマ子の祈禱があつたことである。カルバリ山の耶蘇は、ゲッセマ子の園を經て後こゝに達せられたる者である。私共は人を避けて心靜かに神樣と交り、全く其私心私慾に死んで、身も靈魂も殘らず神樣の御手に引渡し、以來唯其聖旨の儘に生き、働き、苦み、又死るものとなつて、始めて能く十字架の戰士たることを得べきものである。

第三十二章　復活

參考（馬太傳二十七章五十七節至廿八章十五節）

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死るとも生くべし。」（約十一〇二五）

集議院の議員にてヨセフといふ者があり、耶蘇が十字架にかけられ給ふた其夜、大守

ピラトに請ふて其御遺骸を貰ひ受け、之を布につゝみ、岩に掘りたる新らしき墓に納め、大な石を轉ばしてこれに蓋をした。其後へ羅馬の兵卒が往つて封印をなし、且つ警衛して居つたが。それにも關はらず一日おいて次の朝、即ち日曜日の未明に耶蘇は墓より●出て甦り、先づ二人の婦人に現はれ、後幾度か他のお弟子達にも現はれ給ふたといふのが、聖書にのこつて居る耶蘇の御復活の紀事である。

耶蘇は死んで墓に葬られ、三日目に死人の中より甦り給ふた。これは基督教の信仰上最も大切なる事柄の一つである。

第一、耶蘇は事實の上に甦り給ふた。元來聖書といふ書物も隨分舊い昔に出來たものであるから、無理に疑へば、今となつては、誰が何時頃著作したのか、十分判り難い部分もないではない。併し乍らパウロが書た四大書翰、即ち羅馬書、哥林多前書、同後書、加拉太書の如きは、眞面目な學者ならば皆共に、彼は慥にパウロが書たものだと認める丈の確實なる證據が存つて居る。然るに其所謂パウロの四大書翰を讀んで見るに、耶蘇が死んで後甦り、幾度も直々のお弟子達に現はれ給ふたは勿論、パウロ自身にも現れ、又或時は五百人の群衆の中にも現はれ給ひ、現に哥林多前書の出來た頃は、其五百人のうち、存命中の者も多かつたといふ樣な紀事さへ見受けられる。斯る次第故、耶蘇が死んで後甦り給ふたといふ事は、十分信用す可き記錄に存つた事實である。或時英國の一學者は、耶蘇の御復活の事を種子に基督教反對の書物を著さうと思ひ、數年間特別に研究を積んだ結果は却つて大の基督教熱心家となり、後終に耶蘇の御復活に關する證據論をさへ著したといふ話がある。救主耶蘇は斯くして事實の上に甦り給ふたものである。

第二、それと同時に耶蘇は又其お弟子達の心に甦り給ふた。お弟子達の大部分は所謂「無學の賤き民」にて、固より自分達の見識や力量で天下を救ふなどいふ柄の人物ではなかつた。唯耶蘇が彼等と一緒に在し給ふた故、用ゐられて到る處病人を癒したり、又は福音を宣傳へたりして居つたのであるが。一旦其耶蘇が十字架にかけられ給ふて後、彼等は氣も心も挫けて、まるで牧者を失ふた羊の如き有樣であつた。それが何うかした拍子で忽ち異常の力を得、烈火の如くなつて救の道を說き始め、果は斬ら

れても、刺されても、十字架にかけられても、屈しない樣になつたのは何ういふわけであるか。彼等が言ふには「救主耶蘇は死より甦り給ふた。我等は其證據人である」と。お弟子達は耶蘇の御復活を見たるに由て新らしき生命を得、其勢力にて新に救世濟民の大運動に着手するに至つたものである。然も彼等は其肉の眼に耶蘇の御復活を見たのみならず、其心に甦りたる耶蘇を宿し奉り、前には肉の耶蘇と起臥を共にしたる如く、今は靈の耶蘇と偕に毎日の生活を營みつゝ、あれ程大膽勇猛に救の軍を戰ふに至りたるものと見る外はない。耶蘇は眞にお弟子達の心に甦り給ふたものである。

第三、耶蘇は又世界の歷史の上に甦り給ふた。昔羅馬の兵卒が耶蘇を冷たい墓に封じ込ふとした如く、其以來千九百年間或者は彼を學說や儀式の中に封じ込ふとし、或者は彼を罪惡と懷疑の間に葬り去ふとした。併し乍ら耶蘇は其都度いつでも其墓を破り、其封印を切つて外に現はれ出で給ふた。即ち耶蘇は其時代々々に適當なる人物を起して彼等の胸中に甦り、彼等を動かして一代の頽風汚俗と戰ひ、眞理を世に傳へて救を人民の間に及ぼさせ給ふたのである。耶蘇はマルチン、ルーテルの胸の中に甦り給ふた。是に於て宗教改革は行はれたのである。耶蘇はジョン、ハワードの胸の中に甦り給ふた。是に於て監獄改良は始まつたのである。耶蘇はリンコルンの胸の中に甦り給ふた。是に於て彼は身を捐て奴隷廢止の爲に其血祭となつたのである。耶蘇はリビングストンの胸の中に甦り給ふた。是に於て彼は獅子に嚙れ乍ら黑人を濟度する爲に力を盡したのである。耶蘇は又大將ウイリアム、ブースの胸の中に甦り給ふた。是に於て大多數人民の救の爲に耻と苦との十字架を負ふ救世軍人は、世に現はれたのである。此の如く耶蘇は何れの時代にも其封印せられたる墓を破つて世に現はれ給ふ。今も耶蘇は現に世界の歷史の上に甦つて、其活動を續けて居給ふのである。

第四、耶蘇は私共銘々の心と生活との上に甦つて居給ふ。私共は以前には罪を犯して神樣に逆らひ、滅亡の途に急いで居つた者である。他の言でいへば、私共は前に罪に死んだ者であつたのを、耶蘇が新しい生命を吹込んで之を甦らせ給ふたのである。即ち「神は愆と罪に死し所の私共さへ生し給ふたのである。」『私共は基督と偕に

死んだが故に今は基督と偕に生るものである。」耶蘇が千九百年前に死んで甦り給ふたか否やに就いては、何んとか理窟を言ふことが出來るかも知らねど。今現に私共の心の中に甦り、活て働いて居給ふ耶蘇の事に至つては、誰も之を言消すことは出來ない。耶蘇の御復活の格別有難い處は此點にある。私共は昔の使徒や、殉教者や、改革者と同じ樣に、現在復活の耶蘇を我が胸の中に宿し奉り、此世ながらに神樣と偕なる生活を營み得るのである。これより以上の御恵といふが復とあらふか。耶蘇は甦つて現に私共と偕に在し給ふのである。

第五、耶蘇は又甦つて天に歸り、父なる神樣の右に坐つて居給ふ。使徒パウロが「彼は神の體にて居りしかども自ら其神と匹しく在る所の を棄て難きこと丶意はず、反つて己を虛くし、僕の貌を取りて人の如くなれり。既に人の如き形狀にて現はれ、己を卑くし、死に至る迄順ひ、十字架の死をさへ受るに至れり。此故に神は甚しく彼を崇めて諸の名にまさる名を之に與へ給へり」といふたのは、此事である。私共は間もなく此世の旅路を終へ、其任務を竟りたる後天國に歸り、そこにて復活の耶蘇を拜み奉ることが出來る。それ故私共は來世の望のない人達の如く、死ぬる事、及び死んだ後の事を思ひ煩ふ必要がない。聖書に又「汝等心に憂ふること勿れ。神を信じ、又我を信ずべし。我が父の家には第宅多し。我汝等の爲に所を備へに往く。我が居る所に汝等をも居らしめんとて也」とある。これは救主耶蘇が天國にて豫め私共の落着先を用意して待ち給ふとの、有難き御約束の言である。さても忝けないことではないか。

第三十三章　昇天

參考（使徒行傳一章一節至十一節）

「聖靈汝等に臨むに由て後、汝等能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリア、及び地の極に迄、我が證人となるべし。」（徒一〇八）

甦りたる後の耶蘇は、四十日の間幾度となく其お弟子達に現はれ、多くの確實なる證據を以て己の活きたることを示し、又神樣の御國の事に就て敎へ。最後に彼等が暫

くの間エルサレムに留り、兼て御約束の聖靈降臨を待望むべきことを命じ。「聖靈汝等に臨むに因て後、汝等能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリア、及び地の極に迄我が證人となるべし」と仰せられた。然る後彼等が見るがうちに擧げられて、天に還り給ふたのである。

此「聖靈汝等に臨むに因て後、汝等能力を受け、エルサレム、ユダヤ全國、サマリア、及び地の極に迄、我が證人となるべし。」との耶蘇の最後の御言葉は、其以來今日迄、引續き實際の事實となつて顯著なる應驗を現はして居る、有難い御約束の辭である。

第一、耶蘇は其お弟子達にむかひ、「我が證人となるべし」と仰せられた。これは立派な演說や文章で人を說き伏せろといふことではなく、直ちに其身を以て耶蘇の證據人となれと命ぜられたるものである。いつの時代にも宗敎に取て最も大切なるは、之を實地に經驗した人々の證言である。「繪にかいた餅は食はれず世の中は、事實でなくば間には合はぬぞ。」私共は宗敎を講釋したり、又は研究する許りでなく、之を實地に行ひ、身を以て其證據人となるのでなくてはならぬ。昔話に或百姓が、私は平生「かんにん」の四字を守つて身を愼んで居りまするといふと。之を聞た漢學者が「堪忍」は「こらへしのぶ」と書いて二字である、四字ではないといふ。然うすると百姓は、「かんにん」といへば四字とのみ思ふて居りましたが、若し「こらへしのぶ」と書くものならば、復二字ほど殖えて六字になるかと存じまするとと、いふのを聞て漢學者は腹を立て。それだから無學な人間は話にならぬといふと。百姓は笑ひ乍ら、貴君は堪忍の二字を守つて、それ位の事に腹を立られるか知らねど、私は又「かんにん」の四字を守つて、これしきの事に荒い言葉など使ひませぬといふたとある。古人の句に又「文もなく口上もなく粽五把」といふことがあり。兎角効能書よりも大切なるは實際の事實である。それ故私共は文字や理窟に明るいよりも、實地に有難い神樣の御惠を經驗し、我が身を以て其證據人となつて居る樣でなくてはならぬ。

第二、耶蘇は「聖靈汝等に臨むに因て後、汝等能力を受け云々」と仰せられた。基督の宗敎は力の宗敎である。即ち惡人を變へて善人にし、心配苦勞のある人を幸福にし、罪惡に穢れた人間を神樣に似たる聖く義き人物に造りかへる所の力である。ハロ

ルド、ベグビイといふ文學者が英國救世軍の事業を研究し、其中に手もつけられぬ様な惡黨が、見違へる程立派な人間に變つて居る事實を多く見出し。それをマンチエスター大學の總長サア、オリバー、ロッヂといふ有名なる學者に話すと。サア、オリバーは感心して、「科學は多くの事を說明すけれども、然ういふ不思議な事實は到底說明をすることが出來ない。これは眞に神様の御力である。」と言はれたさうである。基督の宗敎には此ういふ大きな力がある。基督敎は唯神學でなく、信仰箇條でなくて、力である、又靈の生命である。使徒パウロが「我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始め、ギリシヤ人、凡て信ずる者を救はんとの神の力たれば也」といふたのは、其事ではないか。

第三、然も此不思議なる力は、人間の智慧、分別や、才能から出るのではなくて、全く神様から來る力である。即ち耶蘇が「聖靈汝等に臨むに由て後汝等能力を受け云々」と仰せられた如く、これは全く聖靈の力である。それ故私共の宗敎は唯人間の分別や、工夫や、努力だけでなく、そんなものゝ以上に、聖靈の御働といふものが伴ふて居らねばならぬ。或人の言に「使徒行傳は即ち聖靈行傳なり」とあり。昔耶蘇の使徒達が人間業ならぬ不思議を世に行ひたるわけは、全く聖靈の御力に由るものにて。それらの顚末を記錄したる使徒行傳は、亦其實使徒達の行動を傳へたといふよりは、寧ろ聖靈なる神様の御行動を傳へたものであるといふ意味である。「萬軍のヱホバ宣ふ、これは權勢に由らず、能力に由らず、我が靈に由るなり。」土塊の如き私共をして能く人間業ならぬ不思議を行はしむるものは、唯此上よりの御力の外はない。

第四、耶蘇は「エルサレム、ユダヤ全國、サマリア、及び地の極に迄我が證人となるべし」と宣ふた。これは先づ手近いエルサレム、ユダヤ、サマリア等に耶蘇の福音を宣傳へ、追々推及して終に世界の極迄も及ぼせといふ御命令である。其如く私共は其受けたる救の惠を、先づ己が家族、親戚、朋友、其他凡て手近い關係の人々に紹介せねばならぬ。それと同時に耶蘇の救は亦世界人類の爲である故、私共は小成に安んずる事なく、次から次へと推及して、終には世界を悉く耶蘇に歸依せしむる迄止まざる覺悟を以て奮闘せねばならぬ。殊に私共日本人としては、我が日本國民が殘らず基督の救を受

くる迄は止まざる決心にて、其爲に祈り、働き、亦其爲めに時間と金錢と勤勞とを惜まず注ぎ込まねばならぬ。或人の說に若し爰に非常に偉い宗敎家が現はれ、年が年中、毎日七千人宛を基督に導くとしても、全世界の人類を殘らず濟度するには、尙九百年の歲月を要する。併し乍ら爰に若し一人の基督信者があつて、年毎に一人を基督に導き、其導かれたる者が亦順送りに皆必ず毎年一人宛を基督に導くことが出來たとすれば、其結果は僅か三十二年間に無慮二十一億四千餘萬人を救ひ得る勘定にて、即ち優に全世界の人類を三十二年間に救ひ得て尙餘りあることになる」といふてある。それ故私共に最も大切なるは、始終心がけて、ひとり〳〵の靈魂を救に入らしむることである。唯お互さへ其心がけにて働くならば、世界は案外速に神樣の御國と化るのである。大將ウイリアム、プースの言に、「往け、十四億の生靈を救はん爲に地の極迄も往け。阻喪する勿れ。此は成し得べきの事なり。此は成し得べきの事なり。若し地上の聖徒が悉く其本分を盡すに於ては、世界は向ふ十年間に救はるゝであらう」といふてある。それに就ても私共は奮ひ起つて、遍ねく世界人類の救の爲に銘々己が本分を盡すことを、心がけねばならぬ。

第五、耶蘇は其お弟子達に對ひ、兼々御約束の聖靈を受くる迄は、暫くエルサレムに留るべきことを命じ給ふた。私共も亦眞に聖靈に由て潔められ、其心を滿され、銘々何れも一箇の救主となつて世に出らるゝ樣、その用意の出來る迄は、密室に退いて神樣に祈らねばならぬ。祈れ、祈れ、祈れ。祈つて聖靈に滿さるゝ迄は之を中止してはならぬ。「祈禱は世界を動かす神樣の腕を動かす」所の力ではないか。

通俗基督傳 終

大正二年八月廿八日印刷
大正二年九月三日發行

定價金廿五錢

不許複製

著者　東京市京橋區銀座二丁目十一番地　山室軍平

發行者　東京市京橋區銀座二丁目十一番地　ヘンリー、ホッダー

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區銀座二丁目十一番地　救世軍本營

大佐補山室軍平著

（第拾四版）

平民之福音

定價　金貳拾錢
特價金拾錢
郵稅　金四錢也

▲附錄として「平民之福音の反響」一文を添ふ▼

▲不思議に力ある稀代の傑作!!!

第拾參版壹萬部を賣り盡して、更に第拾四版貳萬部を要求せらるゝに至りたる「平民之福音」が傳道用書籍として幾許の威力を有するかは唯此一事を以ても察し得らるゝであらふ。

發行所　東京銀座　救世軍本營

●救世軍の雜書類

◎聖潔之栞（參版）（アレンゲル大佐著）
定價金貳拾五錢　郵稅金四錢

◎日本の救世軍（救世軍の事業一班）
定價金拾錢　郵稅金貳錢

◎放蕩息子の喩（五版）（ブース大人著）
定價金壹錢　郵稅八部迄金貳錢

◎諸名家救世軍觀
定價金貳錢　郵稅金貳錢

◎貸座敷業者への忠告（再版）
定價金貳錢　郵稅金貳錢

◎救世軍々歌
定價金五錢　郵稅金貳錢

別に日本文、英文の聖書類種々又英文の救世軍出版物色々あり

東京銀座　救世軍本營

救世軍の機關　**ときのこゝろ**

毎月二回、一日、十五日發行
定價一部金貳錢　郵稅金五厘
一年分郵稅共金五拾五錢

此は救世軍の機關新聞にて、繪入總振假名、誰にでも分かる、面白くて、爲めになること此上なしの宗教新聞である。之を讀んで罪を悔改め、基督の教を受けたる人、又献身して聖き生涯に入りたる人は、至つて多い。速かに購讀なされませ。

少年兵一名

「少年ときのこゝろ」

毎月一日發行、定價金壹錢、郵稅五厘一ヶ年分郵稅共たつた拾八錢也

此は「少年ときのこゝろ」と呼ばるゝ、兒供の繪入宗教新聞である。毎號兒供達の爲めになる信仰上の物語、豪傑談、聖書の話、懸賞問題等あり。家庭教育に心ある人には、是非求めて其家族の讀み物となさるべき新聞である。

東京銀座　救世軍本營

前大將の著書

◎五十二文集　定價金四拾錢　郵税金六錢
◎參版軍令及軍律（兵士の卷）　特價金拾五錢　郵税金四錢
◎再版聖潔の早わかり　定價金拾貳錢　郵税金貳錢
◎大將文集　定價金拾貳錢　郵税金貳錢
◎大將小品文集　定價金拾貳錢　郵税金貳錢
◎六版魂を入かへる法　定價金壹錢　郵税八部迄金貳錢
◎四版救と聖潔　定價金壹錢　郵税八部迄金貳錢

東京銀座　救世軍本營

山室大佐補の著述

◎五版實行的基督教　定價金貳拾五錢　郵税金四錢
◎日本に於けるブース大將　特價金七拾錢　郵税金拾錢
◎再版青年への警告　定價金拾錢　郵税金貳錢
◎禁酒の勸め　定價金拾貳錢　郵税金貳錢
◎再版公娼全廢論　定價金拾錢　郵税金貳錢
◎六版靈魂上の病人
◎六版安心立命の說
◎六版死生の覺悟　各定價金壹錢郵税八部迄金貳錢

東京銀座　救世軍本營

272
1032

終